

平成 26 年 5 月 27 日
OLL セミナー in 東京

オープンソース都市伝説とたたかう

特定非営利活動法人
オープンソースソフトウェア協会
理事 橋本明彦

講演概要：

すでに、本日の聴衆の皆さんにとっては、使ってあたりまえの OSS ではないかと思いますが、これまで、OSS の普及促進の過程では、さまざまな都市伝説が流れていたのではないのでしょうか。そこで、オープンソースの都市伝説とはどういうものか、FUD (Fear, Uncertainty and Doubt) とはまたちょっと異なるその姿を捉えてみようと思います。

講師経歴：

Fortran のプログラマとして情報処理業界でのキャリアをスタートさせる。

Netlib (www.netlib.org) の LINPACK , MINPACK , LAPACK を利用するなど、オープンソースソフトウェアという概念が定式化される以前から、公開されたソースコードを業務に活用する道を歩む。

2005 年 4 月から 2007 年 9 月まで、独立行政法人情報処理推進機構(IPA)常勤研究員。オープンソースソフトウェアセンターに所属。

所属等：

オープンソースカンファレンス.Government 実行委員

福岡県 Ruby・コンテンツビジネス振興会議 顧問

一般財団法人 Ruby アソシエーション 理事

特定非営利活動法人 オープンソースソフトウェア協会 理事

OSS コンソーシアム 賛助会員(個人)

資格等：

特種情報処理技術者(1987年～)

ITコーディネーター(2008年～)

システムアーキテクト(2010年～)

ICTイノベーションミッションナリ(No.57,2014年～)

まず、「オープンソース都市伝説」ということで、
オープンソースとは、何でしょう？
都市伝説とは、何でしょう？

オープンソースの定義

OSI

<http://opensource.jp/osd/osd-japanese.html>

1. 再頒布の自由
2. ソースコード
3. 派生ソフトウェア
4. 作者のソースコードの完全性(integrity)
5. 個人やグループに対する差別の禁止
6. 利用する分野(fields of endeavor)に対する差別の禁止
7. ライセンスの分配(distribution)
8. 特定製品でのみ有効なライセンスの禁止
9. 他のソフトウェアを制限するライセンスの禁止
10. ライセンスは技術中立的でなければならない

ちなみに：

OSI に、Individual Member があるのをご存知でしたか？

The Free Software Foundation、The Linux Foundation の個人会員には、すでに加入していたのですが、本講演の調べ中に発見し、さっそく加入しました。

これとは別のものとして「ソフトウェアの4つの自由」があります。

<https://gnu.org/philosophy/free-sw.ja.html>

- ・ いかなる目的に対しても、
プログラムを実行する自由 (第零の自由)。
- ・ プログラムがどのように動作しているか研究し、
必要に応じて改造する自由 (第一の自由)。
ソースコードへのアクセスは、この前提条件となります。
- ・ 身近な人を助けられるよう、
コピーを再配布する自由 (第二の自由)。
- ・ 改変した版を他に配布する自由 (第三の自由)。
これにより、変更がコミュニティ全体にとって利益となる機会を提供できます。ソースコードへのアクセスは、この前提条件となります。

ウィキペディアによれば：

都市伝説

- ・ 『友達の友達』 という、近い間柄ではなく、特定も出来ない人が体験したものとして語られる、起承転結が見事に流れる話
- ・ 本当にあったとして語られる『実際には起きていない話』
- ・ 実存しない可能性が高い人間が体験した虚偽についての物語
- ・ 『友達の友達』 など身近なようで実際には顔も名前も解らない人々に起きた出来事として語られる奇妙な噂話

<http://ja.wikipedia.org/wiki/都市伝説>

WP:CC-BY-SA

わたしが、今回取り上げようとしていることは、これらの定義とはちょっとずれていると思われれます。のちほど、説明します。

では、まず、都市伝説以前に、古くからIT業界で語られていることを、振り返っておきましょう。

FUD

アンチパターン

ウィキペディアによれば：

FUD

Fear, Uncertainty and Doubt、直訳すると「恐怖、不安、疑念」

FUD とは一般に、大衆が信じていることに反するような情報を広めることで、大衆の認識に影響を与えようとする戦略的試みである。他社製品に乗り換えるにはコストが掛かりすぎると思わせたり、潜在的ライバルでもあるビジネスパートナーに対して影響力を保持しようとしたりする場合である。

この用語は、コンピュータハードウェア業界での偽情報戦術を表す言葉として生まれ、その後より広い意味で使われるようになっていった。

FUD という言葉を最初に使ったのはジーン・アムダールで（1975年ごろ）、彼がIBMを退職して自身の会社アムダール社を創業した後のことである。彼は「FUDとは、アムダールの製品も考慮していたかもしれない潜在的顧客に対してIBMの販売員が教え込む恐怖と不安と疑念である」と述べている。

<http://www.catb.org/~esr/jargon/html/F/FUD.html>

多くの場合 IBM が例として挙げられていたが、1990 年代以降はマイクロソフトと結びつけて語られることが多くなった。Roger Irwin は次のように述べている。

「マイクロソフトは即座に IBM から FUD の技法を学び、IBM がその前の時代に行ったように、80 年代には FUD を最大のマーケティングツールとして使った。最終的には IBM 自身の OS/2 と Win3.1 の競争の際まで FUD を使った。

<http://www.cavcomp.demon.co.uk/halloween/fuddef.html>

漏洩したマイクロソフトの内部文書である「ハロウィーン文書」には、「OSS は長期的に信用でき……（したがって）FUD 戦術では戦えない」とあった。

<http://www.catb.org/~esr/halloween/>

ソフトウェアの特許について判例が確立する以前に「…FOSSは少なくとも235件のマイクロソフトの特許に抵触している」という文章がマイクロソフトから出ている。

http://money.cnn.com/magazines/fortune/fortune_archive/2007/05/28/100033867/

<http://ja.wikipedia.org/wiki/FUD>

WP:CC-BY-SA

こんなこともありました。

「中傷ではなく、真実を」マイクロソフトは Linux を駆逐するか

2005年02月09日 19時33分 更新

[西尾泰三, ITmedia]

<http://www.itmedia.co.jp/enterprise/articles/0502/09/news080.html>

マイクロソフトは2月9日、都内でプレスセミナーを開催した。本社からプラットフォーム戦略主幹プログラムマネージャーのビル・ヒフ氏が来日、「イデオロギーの違いで判断するのではなく、データに基づいた客観的な判断をしてほしい」とマイクロソフトのLinuxおよびオープンソース関連テクノロジーに関する取り組みを語った。

マイクロソフトが平均 25 日でパッチをリリースしており、Linux 勢の中では対応が早い Red Hat や Debian の平均 57 日を大きく上回っている。

Linux カーネル 2.6 のリリースからこれまでに加えられた変更は、1 時間あたり 2.4 個にもなるという。

Red Hat Enterprise Linux 3 (RHEL3) のセキュリティパッチの月次発行数を Red Hat の Web サイトに掲載された情報からカウントし、Windows Server 2003 のほうが脆弱性もセキュリティパッチの発行も少ないというデータを掲示、「これほど頻繁に変更が加えられているものが果たして安定していると言えるのだろうか」と指摘する。

ところで、アムダール、って、知っています？

ウィキペディアによれば：

ジーン・アムダール

アムダール470とサード・パーティの製造会社が提供する互換周辺機器を購入することによって、顧客はIBMのハードウェアを購入せずに、IBMのSystem/360・System/370のアプリケーションを利用できることになった。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ジーン・アムダール>

WP:CC-BY-SA

ウィキペディアによれば：

アンチパターン

ある問題に対する、不適切な解決策を分類したものである。語源は、ソフトウェア工学におけるデザインパターンである。主に失敗した開発プロセスに焦点を当てて失敗に陥るパターンを類型化する。そうすることで、そのような事例の早期発見と対応策に関する提案を目的とする。

アンチパターンという呼び方は、Andrew Koenig が 1995 年に作り出したもので、後に書籍 The patterns handbook で再掲された。

WP:CC-BY-SA

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アンチパターン>

オープンソースソフトウェアのアンチパターン

ITアーキテクトのやってはいけない 設計、メソドログ、実装・テスト、運用、セキュリティのアンチパターン

ISBN-13: 978-4822229924

発売日：2009/11/17

本ムックでは、現場のそんな「やってはいけない」を設計、メソドログ、実装・テスト、運用、セキュリティという5分野に分けて徹底的に探った。

Amazon.co.jp の説明から抜粋

<http://www.amazon.co.jp/dp/4822229920>

128 のアンチパターンが収録されていて、そのうち、4 つが、オープンソースのタグがついています。

実装・テスト編

#063 オープンソースは無料だと思っはいけない

#064、自分でビルドしたバイナリを本番環境で使っはいけない

#065、独自の実装を仕はいけない

セキュリティ編

#128、受け取ったファイルが正しいと信じてはいけない

如何でしょう、どう解釈しますか？

アンチパターンときたら、ベストプラクティスでしょうか。

OSS のベストプラクティスを体感

—Enterprise User's Meeting 2012 レポート

<http://gihyo.jp/news/report/2012/11/0602>

2012年11月6日

赤井誠

2012年10月26日，Linux Foundation が国内では2回目となる

「Enterprise User's Meeting」を開催しました。

Enterprise User's Meeting は、『OSS のベストプラクティス集』として，Linux を活用している企業の責任者が登壇し，活用方法やオープンソースコミュニティとの関係を聞くことができるまたとない機会となっています。

ググったところ、これ以外は、だいたい、企業のセールストークでした。

ところで：

アンチパターンとか、ベストプラクティスとか、他人の経験がもとになっていることを、知識として持っているだけでよいのでしょうか。

CMMI のレベル 4 は、定量化、レベル 5 は最適化、です。
アジャイルでも、振り返りは重要。

しかし実は、古くから、ポスト・モーテムという言葉がありました。

人月の神話－狼人間を撃つ銀の弾はない

ISBN-13: 978-4894716650

発売日： 2002/11

フレデリック・P. ブルックス Jr.

もともとは、1975年に発行されたもの。著者のブルックスは、IBMにおいてOS/360メインフレーム用のオペレーティングシステム開発マネジャーを経験し、OS/360用のオペレーティングシステム開発で生じたさまざまな問題をもとに、プロジェクト管理の問題点と今後どのようにすべきかを論じている。

Amazon.co.jp の説明から抜粋

<http://www.amazon.co.jp/dp/4894716658/>

では、いよいよ：
わたしにとっての「オープンソース都市伝説」ですが

今回の講演内容を考え始めた段階では、
「オープンソース都市伝説」
はネット上には見当たりませんでした。
これが、ありました。

漢（オトコ）のコンピュータ道
MySQLに纏わる10の都市伝説
2009-12-18

<http://nippondanji.blogspot.jp/2009/12/mysql10.html>

都市伝説 1. トランザクションが使えない???

都市伝説 2. InnoDB は遅い???

都市伝説 3. サブクエリがない???

都市伝説 4. 古いバージョンの方が高速で安定している???

都市伝説 5. 毎回必ずソースからビルドしなければいけない???

都市伝説 6. オンラインバックアップが出来ない???

都市伝説 7. HA 構成が組めない???

都市伝説 8. セキュリティが弱い???

都市伝説 9. 社内利用でも GPL 違反で訴えられる???

都市伝説 10. MySQL はオモチャ。大規模アプリケーションでは使えない???

な、わけねーだろ！！

そのような都市伝説には喝！！である。

ということで、まったくのオリジナル、というわけではありませんでした。

わたしにとっての、そもそもの発端は：

オープンソースソフトウェア活用基盤整備事業

「地方自治体における情報システム基盤の現状と方向性の調査」

調査報告書

2007年6月

独立行政法人情報処理推進機構

<http://www.ipa.go.jp/files/000018616.pdf>

問 12、問 13 で、OSS のメリット・デメリットについて聞いている。

メリット

選択肢	%
商用ソフトウェアのライセンス費用を削減することができる	78.7
特定のベンダーに依存せず公正で透明な調達ができる	66.4
システム開発にかかるコストを削減できる	64.5
技術仕様が明らかなたため、更新や連携が容易にできる	48.2
システムの保守・運用にかかるコストを削減できる	47.7
大手だけでなく中堅・中小のベンダーにも競争参加機会ができる	46.3
ウェブサーバ等で十分な実績がある	39.6
OSS に関するコミュニティ等から情報、知識を獲得できる	24.7
高いセキュリティを確保できる	21.1
高い安定性・信頼性を確保できる	19.7

デメリット

選択肢	%
情報システム担当職員に OSS に関する情報やノウハウが不十分	85.1
ベンダーから十分なサポートを受けられない可能性がある	73.4
周辺や同規模の自治体での採用実績が少なく実用性が判断できない	71.7
運用にあたって職員の負荷が増えることが懸念される	66.7
従来のシステムからのデータの移行が困難（外字、自作プログラム等）	62.8
自治体業務に必要なアプリケーション等が不十分	60.9
活用できるベンダーに OSS によるシステム開発に対応する力が不十分	51.6
自治体業務に必要な周辺機器ドライバ等が不十分	41.5
国等が指定するソフトウェアが OSS に対応していない	41.2
コスト面で OSS を採用しない場合とあまり変わらないと思われる	33.3

この結果を見て、当時、わたしは、やや違和感を感じました。

皆さんは、どうですか？

皆さんが、別に、違和感感じません、ということであれば、私の話はここでおしまいです。

見方を変えると

	選択肢	%
デメリット	情報システム担当職員に OSS に関する情報やノウハウが不十分	85.1
メリット	商用ソフトウェアのライセンス費用を削減することができる	78.7
デメリット	ベンダーから十分なサポートを受けられない可能性がある	73.4
デメリット	周辺や同規模の自治体での採用実績が少なく実用性が判断できない	71.7
デメリット	運用にあたって職員の負荷が増えることが懸念される	66.7
メリット	特定のベンダーに依存せず公正で透明な調達ができる	66.4
メリット	システム開発にかかるコストを削減できる	64.5
デメリット	従来のシステムからのデータの移行が困難（外字、自作プログラム等）	62.8
デメリット	自治体業務に必要なアプリケーション等が不十分	60.9
デメリット	活用できるベンダーに OSS によるシステム開発に対応する力が不十分	51.6
メリット	技術仕様が明らかなため、更新や連携が容易にできる	48.2
メリット	システムの保守・運用にかかるコストを削減できる	47.7
メリット	大手だけでなく中堅・中小のベンダーにも競争参加機会ができる	46.3
デメリット	自治体業務に必要な周辺機器ドライバ等が不十分	41.5

デメリット	国等が指定するソフトウェアがOSSに対応していない	41.2
メリット	ウェブサーバ等で十分な実績がある	39.6
デメリット	コスト面でOSSを採用しない場合とあまり変わらないと思われる	33.3
メリット	OSSに関するコミュニティ等から情報、知識を獲得できる	24.7
メリット	高いセキュリティを確保できる	21.1
メリット	高い安定性・信頼性を確保できる	19.7

同じ人が答えているのに、反対のことを言っていないか？

選択肢をわたしなりに分類して、並べてみました。

アプリ	デメリット	従来のシステムからのデータの移行が困難（外字、自作プログラム等）	62.8
	デメリット	自治体業務に必要なアプリケーション等が不十分	60.9
	デメリット	自治体業務に必要な周辺機器ドライバ等が不十分	41.5
	デメリット	国等が指定するソフトウェアがOSSに対応していない	41.2

- ・ アプリ面では、そもそもデメリットの選択肢しかなかった。

コスト	メリット	商用ソフトウェアのライセンス費用を削減することができる	78.7
	デメリット	運用にあたって職員の負荷が増えることが懸念される	66.7
	メリット	システム開発にかかるコストを削減できる	64.5
	メリット	システムの保守・運用にかかるコストを削減できる	47.7
	デメリット	コスト面でOSSを採用しない場合とあまり変わらないと思われる	33.3

・コスト面は、メリット・デメリットが混在し、かつ、順位が入り組んでいる。

(ちょっと、違和感が。)

ベン ダー	デメリット	ベンダーから十分なサポートを受けられない可能性がある	73.4
	メリット	特定のベンダーに依存せず公正で透明な調達ができる	66.4
	デメリット	活用できるベンダーに OSS によるシステム開発に対応する力が不十分	51.6
	メリット	大手だけでなく中堅・中小のベンダーにも競争参加機会ができる	46.3

・ベンダー面では、メリット・デメリットが混在し、かつ、順位が入り組んでいる。

(ちょっと、違和感が。)

情報	デメリット	情報システム担当職員に OSS に関する情報やノウハウが不十分	85.1
	デメリット	周辺や同規模の自治体での採用実績が少なく実用性が判断できない	71.7
	メリット	技術仕様が明らかのため、更新や連携が容易にできる	48.2
	メリット	ウェブサーバ等で十分な実績がある	39.6
	メリット	OSS に関するコミュニティ等から情報、知識を獲得できる	24.7
	メリット	高いセキュリティを確保できる	21.1
	メリット	高い安定性・信頼性を確保できる	19.7

- ・ 情報面では、メリットの選択肢がたくさんあったが、デメリットを選んだ人が多かった。

そもそも、メリット・デメリットと言っても、誰にとってのメリット・デメリットなんですか。

答えているのは自治体の情報担当。問 10 の回答では、

約 6 割の団体が

OSS という言葉を知っており、内容についても理解している

約 4 割の団体が

OSS という言葉は知っているが、内容については十分理解していない

メリット・デメリットはどこで発生するか

OSS の供給側

開発者→SE→フロントの営業

OSS の需要側

情シス担当→現場職員→行政サービスの利用者

供給側には、経営者、自治体等の産業振興政策実施サイド、なども。

需要側には、主権者としての自治体住民、首長、議会、なども。

とても、アンケートにある 10 項目の多肢選択から選ぶようなことでは、片づけられません。

公表された報告書では、問 12 と問 13 のクロス集計、さらに、問 10 とのクロス集計は、掲載されていない。

クロス集計したら、どうなるのだろう。

多くの人がメリットとして選んでいる項目を選んでいる人は、多くの人がデメリットとして選んでいる項目を選んでいる。

つまるところ、オープンソースについて、「常識」とされていることを、どれだけ知っているか、を、答えていることになってはいないか。

わたしの言うところの、オープンソース都市伝説

自分が身をもって感じていることではなく、常識のある人ならこう答えるだろう、という答えを言ってしまおう、一連の答え

あなたは、思わず答えてしまおう都市伝説は、ありますか？

もし、アンケートが、メリットとデメリットを別々に聞くのではなく、ある観点についてメリットと思うかデメリットと思うか、ランク付けさせるような形式であれば、結果は違ってきたかも。あるいは、ほとんどの人が、中立の回答だったかも。

あるいは、そもそも、世の中反対のことがどちらも正しい、と
思われていることは、まあ、ありますね。

反対の意味を持つことわざ

<http://www5e.biglobe.ne.jp/~minineta/kokugo-hantaikotowaza.htm>

善は急げ	⇔	せいては事を仕損じる
三人寄れば文殊の知恵	⇔	船頭多くして船山に上る
渡る世間に鬼はなし	⇔	人を見たら泥棒と思え
二度あることは三度ある	⇔	柳の下のどじょう
一石二鳥	⇔	二兎を追うものは一兎を得ず
危ない橋を渡る	⇔	石橋をたたいて渡る
好きこそものの上手なれ	⇔	下手の横好き
立つ鳥後をにごさず	⇔	旅の恥はかき捨て
瓜のつるになすびはならぬ	⇔	とびが鷹を生む

ちなみに、IPA のこの調査は第 1 回で、すでに第 7 回まで、結果が公表されています。

問 12、問 13 は、2 回目以降、無くなってしまいました。
6 回目からは、オープンソースについての設問は、ひとつも無くなりました。

IPA のオープンソースソフトウェアセンターが、改組・改称されていて、調査のスコープが移っていったからでしょう。

地方自治体における情報システム基盤に関する調査

最終更新日：2014 年 3 月 20 日

独立行政法人情報処理推進機構

技術本部 国際標準推進センター

<http://www.ipa.go.jp/osc/jichitai/>

おまけに、IPAはこの調査と並行して、「オープンソースソフトウェア活用ビジネス実態調査」を、3回実施しました。

ここでは、ITベンダーに対して、OSSが自社のビジネスにとってどんなメリット・デメリットを持つか、を聞いています。その回答の分析は、皆さんへの課題としましょう。

第1回オープンソースソフトウェア活用ビジネス実態調査

http://www.ipa.go.jp/software/open/oss/sc/seika_0608.html

第2回オープンソースソフトウェア活用ビジネス実態調査

http://www.ipa.go.jp/software/open/oss/sc/seika_0803.html

第3回オープンソースソフトウェア活用ビジネス実態調査

http://www.ipa.go.jp/software/open/oss/sc/seika_1004.html

では、ほかに、オープンソースのメリット・デメリットを聞いているような、アンケートは、あるでしょうか。

MOONGIFT

オープンソース利用実態アンケートにご協力ください！

2014/01/08 (結果は未発表？)

<http://www.moongift.jp/2014/01/オープンソース利用実態アンケートにご協力くだ/>

オープンソースの利点は何だと思いますか？

無償であること

コミュニティ

ソースコードが読める

開発に参加できる

その他:

オープンソースの不安な点はなんですか？

保証/SLA

セキュリティ

ソースコードがオープンになる

ライセンス

その他

国内オープンソースソフトウェア利用実態調査結果を発表

2014年1月8日

IDC Japan 株式会社

<http://www.idcjapan.co.jp/Press/Current/20140108Apr.html>

- ・ 企業における OSS の導入率は 32%、前回調査から 6.7 ポイント上昇
- ・ OSS の活用に対して積極的な企業は、ビジネスも成長している
- ・ OSS RDBMS の使用傾向に違い。一般ユーザー企業では MySQL、サービスプロバイダーでは PostgreSQL での使用が多い
- ・ Hadoop の使用目的はバッチ、ログの解析、ストレージ、検索／インデックス作成など多岐にわたる

90 万円するレポートなので、内容は見てません。

OSS の利用状況（2011 年）

キーマンズネット

2012/01/17

<http://www.keyman.or.jp/at/30004498/>

2010 年にも、同様な調査を行っています。

メリット

選択肢	%
導入コストの削減が可能な点	92.9
特定ベンダに依存しなくてよい点	55.5
運用コストの削減が可能な点	48.2
関連情報が豊富にぞんざいする点	42.9
ソースコードを参照し、自社仕様に変更することができる点	35.0
納期の短縮が可能な点	21.8

デメリット

選択肢	%
サポートが得にくい	75.6
利用 OSS の今後の存続が不明	56.6
セキュリティホールに対するコミュニティの対応に不安がある	40.6
トータルでの投資額が高くなるという懸念がある	13.4
機能付加が常時行われ、開発スケジュールが立てにくい	12.5
その他	6.6

	選択肢	%
メリット	導入コストの削減が可能な点	92.9
デメリット	サポートが得にくい	75.6
デメリット	利用 OSS の今後の存続が不明	56.6
メリット	特定ベンダに依存しなくてよい点	55.5
メリット	運用コストの削減が可能な点	48.2
メリット	関連情報が豊富に存在する点	42.9
デメリット	セキュリティホールに対するコミュニティの対応に不安がある	40.6
メリット	ソースコードを参照し、自社仕様に変更することができる点	35.0
メリット	納期の短縮が可能な点	21.8
デメリット	トータルでの投資額が高くなるという懸念がある	13.4
デメリット	機能付加が常時行われ、開発スケジュールが立てにくい	12.5
デメリット	その他	6.6

コストに関する項目については、矛盾は無さそうですね。
情報面、ベンダー面は、錯綜している感じがあります。

ということで、現段階としては、
わたしの言うところの、オープンソース都市伝説

自分が身をもって感じていることではなく、
常識のある人ならこう答えるだろう、
という答えを言ってしまう、一連の答え

から、脱却した、と言えるでしょうか・・・

では、このような都市伝説の呪縛から、わたしたちを解き放つような取り組みは、あるのでしょうか。

国内でも、いろいろな団体があります。

OLL、
OSS コンソーシアム、
日本 OSS 推進フォーラム、
オープンソースソフトウェア協会 . . .

オープンソースソフトウェア協会の宣伝を少々。

特定非営利活動法人オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

<https://www.facebook.com/pages/オープンソースソフトウェア協会/187191934718179>

昨年度は、長岡でフォーラムを開きました。

http://www.ossaj.org/seminar/140214/ossaj_seminar_20140214_brochure.html

今年も、甲信越地方で、ちょっと、狙っています。

地方で活躍している方を東京に呼んで、セミナーを開きたいので、ぜひ、名乗りを上げてください。

IT Leaders OSS 最前線

オープンソースのメリットを引き出す

<http://it.impressbm.co.jp/articles/-/6377>

2009年2月20日(金)

もともとは、野村総合研究所「ITソリューションフロンティア」2008年8月号の記事。

野村総合研究所は、公開情報に基づき客観的な評価を行い「オープンソースマップ」を作成している。

「成熟度」と「プレゼンス（存在感）」という2つの観点で評価し、これらを軸とする平面にマッピング

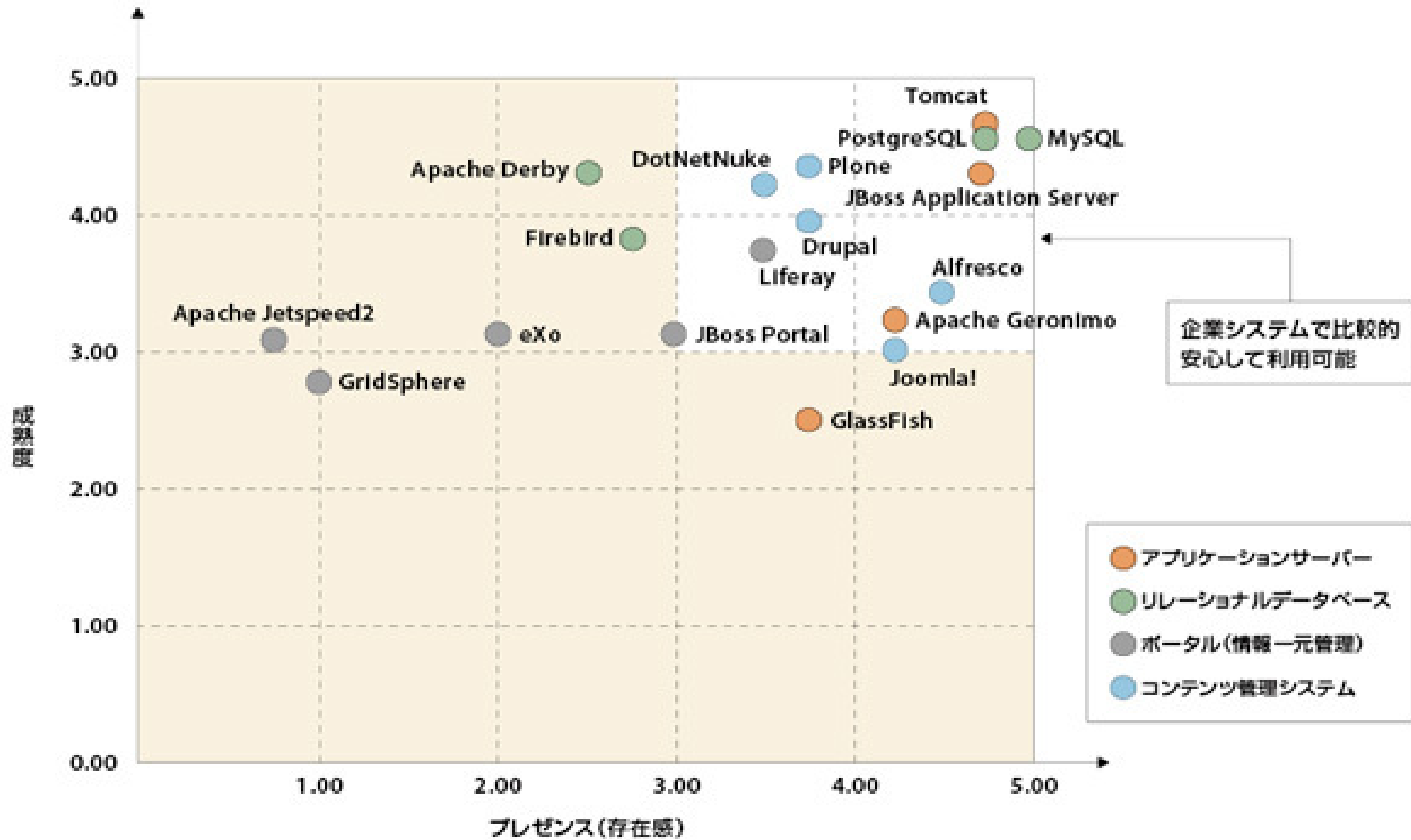
プロジェクトの歴史、関連ドキュメントの量・種類、リリース回数、主要IT系Webサイトでの関連用語の登場回数、検索サイトでのヒット数、など。

「成熟度」は、プロジェクトの存続期間、メーリングリストの投稿数、ドキュメントの充実度、リリース回数、過去6カ月間のオープンバグの数、公開されているクリティカルなバグの数

「プレゼンス」は、主要なIT系Webサイトでの登場数、検索エンジンでのヒット数、ダウンロードされた回数、サポートしているベンダー数

米カーネギーメロン大学が提唱するオープンソース評価のための標準フレームワーク「BRR (Business Readiness Rating for Open Source)」に基づき、各項目に重みづけをして加重平均を計算するといった、NRI独自の基準を加えて決定している。

なるほど、オープンソースを客観的に評価することは、重要です。都市伝説の払拭にも、結びつくことでしょう。



http://it.impressbm.co.jp/mwings/9/1/-/img_91d51ea806dd2bf15a71655597d6329a44082.jpg

BRR の他にも、たとえば、EU で行われているものとして、

The QualiPSo Open Maturity Model

<http://qualipso.icmc.usp.br/OMM/>

があります。日本では、IPA が連携しています。

OSS 信頼性評価ツール活用セミナー開催のご案内（本セミナーは終了しました。）

http://www.ipa.go.jp/osc/qualipso/seminar_20120314.html

このページから、評価用のツール類に関する報告書を入手できます。

企業主催の講演会ですが、オープンソースのメリット・デメリットを正面から取り上げたものがありました。

Prowise Business Forum in Tokyo 第46回

講演レポート

～ITpro 副編集長 高橋氏がオープンソースを斬る！～

なぜ企業はオープンソースを使わないのか

2010年11月18日(木) JR品川イーストビル 20F

<http://www.hitachi-solutions.co.jp/forum/tokyo/vol46/>

ちょっと古いでしょうか。

なぜ企業はオープンソースを使わないのか（1）

～最新動向と使わない理由～

株式会社日経 BP ITPRO 編集 副編集長 高橋 信頼 氏

これまで普及している OSS を企業はなぜ自社の情報システムに利用しないのだろうか。そのヒントとして IPA（独立行政法人 情報処理推進機構）の調査を引き合いに出した高橋氏は、IT ベンダーが考える OSS のメリットに、「コスト削減」、「特定ベンダーからの脱却」、「情報が豊富」、「ソースコードの参照・変更」といった要素がある一方で、デメリットには「緊急時のサポート」、「永続性」、「製品計画が見えない」などの不安が多かった点を指摘する。

なぜ企業はオープンソースを使わないのか（2） ～導入におけるメリットと安心・安全に活用するポイント～ OSS コンソーシアム 副会長 吉田 行男氏

冒頭、吉田は、2010年3～4月に、Linux Foundation SI Forum が参加企業9社を対象に実施した「2009年度オープンソースソフトウェア導入実績調査」の結果を示し、OSSの活用範囲が広がり、運用管理や開発環境、Web/APサーバの領域ではOSSが定番化されている一方で、業務アプリケーションやデスクトップアプリケーションにはいまだ定番はない実態が明らかになったと解説する。た、2010年4月にIPAが発表した「第3回オープンソースソフトウェア活用ビジネス実態調査（2009年度調査）」では、OSS普及の阻害要因として、「サポートに対する不安」、「ライセンスに対する懸念」、「人材および経験の不足」が挙げられたという。

オープンソースのコミュニティには、こんなブログを書いている方もいます。

OSS Japan

オープンソースで発注するメリット

2012/06/13(水) 20:07 JST

投稿者: Ivy(今駒 哲子さん)

http://www.ossj.jp/article.php/oss_merit

画面設計もスクラッチ開発では細かくすべてを完全に設計してはじめるべきではありませんが、オープンソースの場合、すでにルールが決まっていたり、APIが用意されているので部品要素の画面設計は、オープンソースの仕様にまかせて設計指示を省略できるので、発注時の設計のすり合わせにも時間をとられません。

ハックではなく、オープンソースが標準で提供する拡張する仕組み（アドオン）を活用して機能追加やカスタマイズをする開発会社を選ぶことが大事です。逆に、安易にハックする会社は要注意、ということもいえます。ハックしなければ使えないようなオープンソースは未成熟なオープンソースだということもいえます。

Standing on the Shoulder of Linus

オープンソースのメリットデメリット

<http://ounziw.com/opensource/>

水野史土さんのブログ

メリット

学習／運用効率

改変の自由

ユーザーのコミット

開発の継続性

デメリット

人員配分

無保証

全体の整合性

う～ん、ごく最近のものが、ありませんね。

わたしたちは、オープンソースのメリット・デメリットについて、もはや気にしなくなってしまったのでしょうか。

メリット・デメリットを考えるには、

OSS の供給側

開発者→インテグレータ→フロントの営業

OSS の需要側

情シス担当→現場職員→行政サービスの利用者

といった構造を示しましたが、ここには、規模の軸があります。
エンタープライズなのかどうか、で、判断が分かれてくるでしょう。

そこで、エンタープライズですが：

どう考えても、基幹系の技術者は駆逐される

2014/05/19

木村 岳史＝日経コンピュータ

<http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20140515/55708>

[3/](#)

企業の情報システムの開発において、Web系の技術者が主役の座に就くのは歴史的必然である。そして基幹系の技術者の多くが、その事実気付かないし、気付いても認めようとししない。だから、駆逐されてしまうのである。

つまり、オープンソースのメリット・デメリットを考えるにしても、エンタープライズの立場からのアプローチは顧みられることが無くなり、Web系にとってのそれが、意味を持つようになります。

で、Web にとっての、オープンソースのメリット・デメリット、って、何でしょうか？

GPL だって、別に何の問題もありません、AGPL でなければ。

Why the Affero GPL

<http://www.gnu.org/licenses/why-affero-gpl.en.html>

MongoDB のライセンス問題

日本 MongoDB ユーザー会

<http://www.mongodb.jp/mongo/licence>

MongoDB のコアサーバーはライセンスで GNU AGPL v3.0 提供されています。

GNU AGPL v3.0 の特徴は『そのシステムと通信するプログラムのソース公開』を要求している点です。

これにより事実上、商用利用がほぼ不可能になるライセンスです。勿論 MongoDB にはその様な意図は無く商用利用を可能とする為にドライバー（クライアント）を別ライセンスで提供しています。その為、ライセンス形態が他のオープンソースソフトウェアと比べて若干複雑になっており誤解が生じ易く、時に導入障壁になっています。

ということは：

Web系の時代になると、そもそも、オープンソースかどうか、という観点の重要性も、薄らいできてしまうのでしょうか。

それは、オープンソースが廃れたのではなく、遍く存在するようになった、空気のような存在になって、広く使われるようになったためでもあります。

Web系の技術者にとっては、オープンソースの制約はほとんど意に介することなく、使えるものはどんどん使えばよい、ということになるのでしょうか。

もはや、オープンソースは、オワコンなのではないでしょうか。

冷静になりましょう。

今回、オープンソースのメリット・デメリットについてのアンケートをきっかけに、オープンソース都市伝説があるのではないか、という気づきを報告させていただきました。

それは、

自分が身をもって感じていることではなく、常識のある人ならこう答えるだろう、という答えを言ってしまおう、一連の答え

というものでした。

今、そもそも何故オープンソースなのか、という観点も、急速に相対化している状況があると思われます。

そのような中、オープンソース都市伝説は、手頃な判断基準として、無批判に継承されていく危険性が感じられます。

結果として、オープンソースの本当の意義を掘り下げることなく、無用な懸念に支配された、「自主規制」のような判断と行動が広がる危険性が感じられます。

「空気」の研究
(文春文庫 (306-3))

山本 七平 (著)

ISBN-13: 978-4167306038

発売日： 1983/10

<http://www.amazon.co.jp/dp/4167306034>

もともとの単行本は、昭和 52 年 4 月刊行です。
今では、電子書籍もあります。

閉された言語空間—占領軍の検閲と戦後日本
(文春文庫)

江藤 淳 (著)

ISBN-13: 978-4167366087

発売日： 1994/1/10

<http://www.amazon.co.jp/dp/4167366088>

もともとの単行本は、1989 年刊行です。

同じような問題は、オープンソースとは別の、ソフトウェアの4つの自由についても、感じられるのではないのでしょうか。

あなたの生活を支配しているさまざまなものが、膨大なソフトウェアによって形成されている状況の中、
では、どんなプログラムが動いているのか、どれくらいまともな品質のソースコードなのか、
実際の利用者であるあなたは、知ることができるのでしょうか。

オープンソースは、あらゆるロックインから、あなたを解放するための、手掛かりだったはずです。

とらわれの心理を克服し、物理、論理、法理を基盤にすえた実証的な学習、実践、研究が求められているところです。

都市伝説に惑わされず、間違った自主規制で自分を縛ることなく、先へ進みましょう。

おわり